

1-1 建物概要		1-2 外観	
建物名称	CP棟・R3館	階数	地上5F
建設地	小田原市寿町五丁目510番1	構造	S造
用途地域	工業地域,法22条区域,第5種高度地区	平均居住人員	500 人
気候区分		年間使用時間	2,100 時間/年
建物用途	事務所,	評価の段階	実施設計段階評価
竣工年	2016年6月 予定	評価の実施日	2015年4月1日
敷地面積	16,745 m ²	作成者	株式会社大林組
建築面積	5,042 m ²	確認日	2014年4月1日
延床面積	16,594 m ²	確認者	株式会社大林組



2-1 建築物の環境効率 (BEEランク&チャート)

BEE = 1.6

S: A: B+: B-: C:

2-2 ライフサイクルCO₂(温暖化影響チャート)

標準計算

このグラフは、LR3中の「地球温暖化への配慮」の内容を、一般的な建物(参照値)と比べたライフサイクルCO₂排出量の目安で示したものです

2-3 大項目の評価(レーダーチャート)

2-4 中項目の評価(バーチャート)

Q のスコア = 3.2

Q1 室内環境

Q1のスコア = 3.1

Q2 サービス性能

Q2のスコア = 3.4

Q3 室外環境(敷地内)

Q3のスコア = 3.4

LR 環境負荷低減性

LR のスコア = 3.5

LR1 エネルギー

LR1のスコア = 3.8

LR2 資源・マテリアル

LR2のスコア = 3.6

LR3 敷地外環境

LR3のスコア = 3.1

3 設計上の配慮事項		
総合	その他	
化粧品研究施設として「美のゲート」を中心に清潔感のある意匠とし、敷地内の他の建物とも統一感のある景観形成を意図している。一方、大地震後も被災者の受け入れ施設として機能維持が出来るよう、構造的には「官庁施設の総合耐震計画基準及び同解説による耐震安全性の目標」による 類とし、屋上を地域住民の避難場所として提供する計画である。	既存建物としての東屋は廃棄せずに移設するなど、可能な限り既存利用を行う計画としている。	
Q1 室内環境	Q2 サービス性能	Q3 室外環境(敷地内)
R3館の2階~4階はそれぞれ大部屋形式の研究施設として研究者間の交流が生まれる構成とすると共に、中央の吹抜け階段により各フロアの連携も高めている。新幹線に近いが、室内の騒音レベルとして45dB以下を目標に防音性を高め、CP棟では屋上庭園を設けるなど、気持ちの良い外部環境となる計画としている。	基本的な天井高さは2.8m以上として快適性を確保すると共に、設備更新が容易なように階高は4.2m確保し、かつパンネ(床埋込み配管取り出し口)を研究室各所に設ける計画とした。また、研究室の主要幹線の下部天井は連続的に取り外しが可能なように工夫している。	既存の緑地の強化を目標に敷地中央部にアークスクエアと呼ぶ大庭園を設け、良好な緑地環境を作り出す計画としている。また、CP棟の2階にテラス、3階に屋上庭園を設けて、アークスクエアと一体となった外部空間とする計画とした。
LR1 エネルギー	LR2 資源・マテリアル	LR3 敷地外環境
アークスクエア側(建物東側)を横連窓として明るい室内空間とすることで、電力を補う計画としている。照明器具はLEDを主体として、人感センサーを各所に採用するなど、省エネに配慮した計画としている。	節水型器具の採用等により、可能な限り水資源に配慮した計画としている。	近隣側(西側)は単窓として、近隣への視線に配慮した計画とし、敷地外別敷地(道路)を位置指定道路として近隣にも開放するなど、地域に配慮した計画としている。

CASBEE: Comprehensive Assessment System for Built Environment Efficiency (建築環境総合性能評価システム)

Q: Quality (建築物の環境品質), L: Load (建築物の環境負荷), LR: Load Reduction (建築物の環境負荷低減性), BEE: Built Environment Efficiency (建築物の環境効率)

「ライフサイクルCO₂」とは、建築物の部材生産・建設から運用、改修、解体廃棄に至る一生涯の間の二酸化炭素排出量を、建築物の寿命年数で除した年間二酸化炭素排出量のこと。評価対象のライフサイクルCO₂排出量は、Q2, LR1, LR2中の建築物の寿命、省エネルギー、省資源などの項目の評価結果から自動的に算出される